シルクロード・ネットワーク・新庄フォーラム２０１６

シルクロードでつなぐ街と人

「原蚕の杜」から絹産業遺産の再生・活用・継承を学ぶ

旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）　撮影：田村　収

平成 28 年 6 月 25 日（土）
シンポジウム・交流会
平成 28 年 6 月 26 日（日）

会場：新庄ニューグランドホテル

主催：公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）
NPO 法人 街・建築・文化再生集団（RAC）
後援：山形県、新庄市、新庄教育委員会、大日本蚕糸会

ーシルクの街・横浜より　ごあいさつー

シルクロード・ネットワークの推進にむけて-

横浜は絹貿易拠点として栄え、現在の発展は絹によって築かれたと言っても過言ではありません。とはいえ、現代の都市開発の中で、絹産業の記憶が、正当に評価されることなく忘れ去られようとしている事実もあります。横浜には、絹産業が築き上げた建造物等の遺産や膨大なシルク関連資料、そうした資料の中にしか見られない多くの先人達の物語等が残されており、私たちは、これらを明日の横浜に伝えていくべき地域資産として考えています。そして、これらは横浜単独で出来たものではなく、多くの地域と結びつき、先人達の着想と努力で築き上げられたものです。横浜から絹の道を辿ると全国に及び、各地に蚕種・養蚕・製糸・織物・流通等の絹遺産が今も息づいています。また、富岡製糸場の世界遺産登録をはじめ、近年、蚕種や養蚕で繁栄した町や集落が重要伝統的建造物群保存地区に選定される一方、製糸工場や鉄道関連施設が近代化遺産として重要文化財に指定されています。昨年、新たに群馬県内の絹関関連市町村が絹物語を紡ぎ、日本遺産に認定されています。今や絹関連遺産は、かけがえのない地域遺産として注目を集めています。

こうした実情を踏まえ、絹文化の足跡を振り返り、文化遺産として将来に亘り継承していくことと、地域活性化の切り札として活かす手だてを多くの地域と連携して創り上げる為に平成２７年３月の「シルクロード・ネットワーク・横浜フォーラム」の開催を機に新たな地域づくり活動組織として「シルクロード・ネットワーク協議会」を設立したしました。

シルクロード・ネットワーク発足後、各地の絹遺産関連市町村と連携を図るべく現状調査を行ってまいりました。その結果、蚕糸試験場等の保存に多大な実績のある山形県新庄市においてこのたび第２回「シルクロード・ネットワーク・新庄フォーラム」を開催する幸運に恵まれました。この場を通じ東北地方をはじめ全国各地の絹文化保全活動などを推進するとともに、より多くの地域の皆さんと連携を深めてまいりたく存じます。

最後になりましたが、開催をご快諾くださった新庄市長 山尾　順紀様をはじめ多くの関係の皆様に、こころよりお礼を申しあげます。

平成 28 年 6 月２５日

横浜市認定歴史的建造物「ベーリック・ホール」設計：J.H.モーガン

撮影：米山　淳一

公益社団法人横浜歴史資産調査会
（ヨコハマ　ヘリテイジ）
会長　宮村　忠

ー養蚕県・群馬より　ごあいさつー

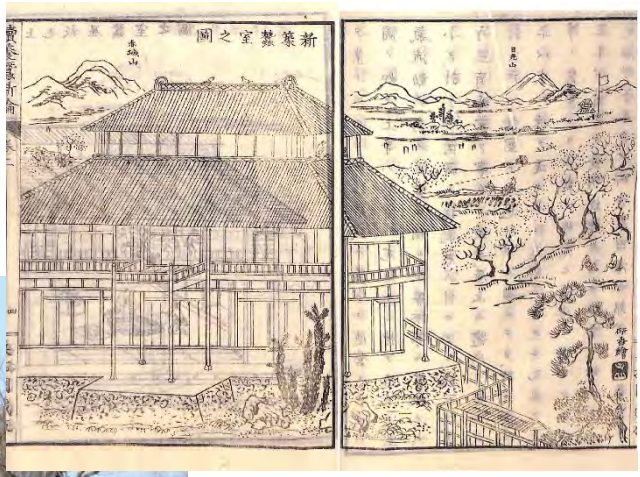
原風景としての養蚕ーシルクロード・ネットワーク新庄大会によせて

50 年以上前、東京・西郊（国立）に育った私が、まちなかの小学校から天満宮や多摩川までいくとき通り抜けた、背丈よりも高い桑の木が整然とならぶ桑畑の光景は、いまも心に残っています。またよく遊びに行った隣まち（立川）の友達の家には、土間と吹抜の小屋組があり、その土間を抜けると一面に拡がる桑畑は、格好の遊び場となっていました。そのときは気づくはずもありませんでしたが、いま思い返してみると、この建物はまさに総二階の養蚕民家だったのです。当時すでに養蚕は行われていなかったかもしれませんが、建物と桑畑の織りなす情景は、東京の郊外では養蚕が日常性を有していたことを示しています。

考古学の遺跡は、たとえ痕跡であっても、過去を伝えその時代に思いを馳せることを促します。一方、もっと近い時期まで生活の一部を構成し、現在の社会に直結するはずの養蚕は、建物は建て替えられ、桑畑は失われ、産業として消えかけ、実像が奪われ続けてきました。しかし、養蚕と製糸が、文化的、経済的に日本の近代社会を成り立たせてきたことは、言をまちません。単なる過去の遺物ではなく、いまとこれからを結びつける要因として養蚕を再考することは、シルクロード・ネットワークに集うかたがたの意志であると思います。養蚕・製糸に関わる記憶を継承し、繭と絹を媒体とした地域間の連携を構築することに、シルクロード・ネットワークの存在意義はあるといえます。

平成 28 年 6 月 25 日

NPO 法人街・建築・文化再生集団理事長
理事長　星　和彦



島村　田島弥平家の蚕室
松ヶ岡開墾場の原形
『続養蚕新論』より

島村の養蚕民家（慶応二年（1866）建造）　　撮影：森田　万己子

講師プロフィール

□佐滝　剛弘（さたき　よしひろ）（高崎経済大学地域科学研究所　特命教授、ＮＰＯ産業観光学習館　特任講師）

１９６０年　愛知県生まれ

１９８３年　東京大学教養学部(人文地理専攻)卒業後、ＮＨＫにディレクターとして入局。
「ＮＨＫスペシャル」「クローズアップ現代」「小さな旅」などのドキュメンタリー番組の制作に携わる。

２０１６年　現職

著作等

『旅する前の世界遺産』(文春新書)、『世界遺産の真実』(祥伝社新書)、『切手と旅する世界遺産』(日本郵趣出版)、『日本のシルクロード～富岡製糸場と絹産業遺産群～』(中公新書ラクレ)、『郵便局を訪ねて１万局～東へ西へ「郵ちゃん」が行く～』(光文社新書)、『それでも、自転車に乗りますか？』(祥伝社新書)、『観光地「お宝遺産」散歩』(中公新書ラクレ)『国史大辞典を予約した人々』(勁草書房) など

□脇坂　隆一（わきさか　りゅういち）　国土交通省東北地方整備局東北国営公園事務所々長

１９７２ 年　岐阜県生まれ。

１９９４年　東京大学農学部卒業、建設省入省。青森市都市整備部長、国土交通省都市・地域整備局 景観・歴史文化環境整備室課長補佐（通称：歴史まちづくり法を担当）、東北地方整備局建政部都市調整官を経て現職

□武田　一夫（たけだ　かずお）　新庄市教育委員会教育長

１９７１年　法政大学法学部法律学科卒業、新庄市役所に奉職、新庄ふるさと歴史センター所長、商工観光課長、教育委員会管理課長、新庄市企画調整課長兼エコロジーガーデン所長、総務課長を経て２００８年に定年退職

２００８年　現職

□米山　淳一（よねやま　じゅんいち）（公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事、RAC 理事）

１９５１年　神奈川県横須賀市生まれ

１９７４年　獨協大学外国語学部 英語学科卒業、財団法人日本ナショナルトラストに入所、事業局長を経て退所

２００９年　公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長に就任

２０１４年　ＲＡＣ理事就任

２０１５年　シルクロード・ネットワーク設立

現在、獨協大学オープンカレッジ講師　ＮＨＫ文化センター（青山）講師・東映株式会社「大鉄道博覧会」企画プロデューサー・日本鉄道保存協会顧問

所属学会：産業考古学会・棚田学会・日本観光研究学会ほか

委員等：横浜市歴史的資産調査委員会（横浜市）1992～／名勝田毎の月の棚田保存整備委員会及び文化的景観保存活用委員会（千曲市、文化庁）2003～／北海道遺産・第三音更川橋梁」保全推進委員会委員（NPO 法人東大雪アーチ橋友の会・上士幌町）／稲荷山地区伝統的建造物群保存対策調査委員会委員ほか、

地域遺産プロデューサーとして全国の自然･歴史遺産を貴重な地域遺産として捉え､保全･観光活動に従事。大の鉄道ファンです。

著作等：

『地域資産　みんなと奮闘記』、『歴史鉄道　酔余の町並み』ほか

□星　和彦（ほし　かずひこ）(NPO 法人　街・建築・文化再生集団理事長・前橋工科大学学長・工学博士)

１９５１年　東京、駅舎の有名な国立生まれ

１９７５年　東京都立大学卒業、東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程単位取得満期退学

１９９４年　前橋市立工業短期大学助教授（建築史・建築文化資源学）に奉職、前橋工科大学助教授、教授を経て、２０１５年前橋工科大学々長に就任

１９９９年　ＲＡＣ設立、理事長

２０１５年　シルクロード・ネットワーク設立

委員等:群馬県景観審議委員／群馬県景観アドバイザー／日本建築学会関東支部建築歴史／意匠専門研究委員会委員

シェークスピアからディケンズにかけての英国建築史と建築文化をこれからの社会の資源として確立する方法をテーマに西洋建築史（英国建築史）、歴史的環境（建築文化資源学）を専攻する。

□後藤　治（ごとう　おさむ）(NPO 法人　街・建築・文化再生集団理事・工学院大学教授・工学博士・一級建築士)

１９６０年　東京生まれ

１９８４年　東京大学卒業

１９８８年　東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程中退、文化庁文化財保護部建造物課調査官を経て、１９９９年工学院大学建築都市デザイン学科助教授（建築史・建築保存修復学）、建築学部建築デザイン学科教授、現在、工学院大学常務理事

２０００年　ＲＡＣ理事に就任

２０１５年　シルクロード・ネットワーク設立

委員等：NPO 法人　木の建築フォラム理事／稲荷山地区伝統的建造物群保存対策調査委員会委員他

著作等

『建物の見方・しらべ方　江戸時代の寺院と神社』（共著）『建築学の基礎６　日本建築史』、『都市の記憶を失う前に』、『それでも「木密」に住み続けたい』等、多数

文化庁文化財保護部建造物課文化財調査官の経験を活かして歴史的建築物(町並)の保存･活用に力を注ぐ。
また、柔軟な発想力、冷静な観察眼を持ち合わせており指導者としても評価が高い。
東日本大震災の復興に対しては、石巻市での『東北に美しい村を復興する Project』
気仙沼市「尾形家修復保存」、真壁町「ベトナム人技能者による修復支援」等、積極的に関わっている。

（本プロフィールは､ご本人から頂いたもの以外は､事務局中村が作成しました｡内容についての責任は中村にあります｡）

「港・鉄道・ヨコハマ」プロジェクト」の推進

港と来れば続く言葉はヨコハマ。歌の文句ではないけれどこれほどヨコハマを表現するのに相性の良い、いや響きの良いフレーズはないだろう。しかし、

港、ヨコハマだけでは現実的にはピンと来ない。なぜなら港だけでヨコハマが発展した訳ではないからだ。

ヨコハマ自慢の港は安政５年の日米通商修好条約締結後の翌安政６年に開港したことに起因する。開港を機に外国船が出入りし寒村は賑わい溢れる港町へと発展したのだ。外国人用の居留地が設けられ吉田橋を介し、これを結界として居留地を関内、それ以外を関外と呼んでいた。

明治５年（１８７２）１０月には我が国初の鉄道が新橋―横浜（現・桜木）

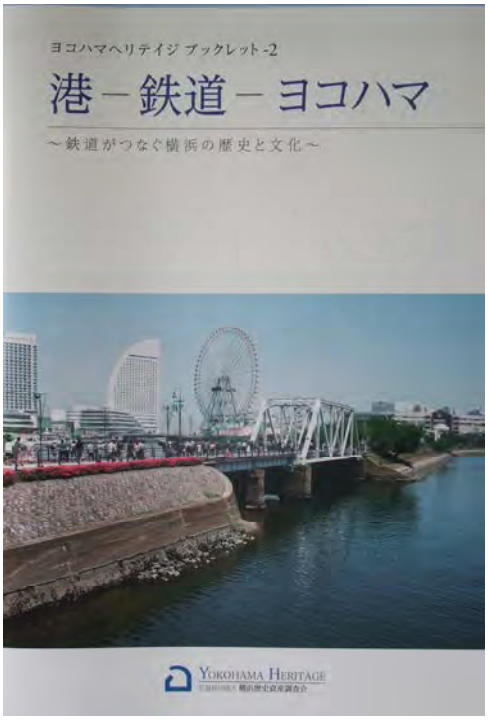
開通。これにより人の行き来や物流も盛んになった。その後、明治期に鉄道は全国に延伸。明治２２年には東京―神戸間の東海道本線が全通。合わせて横須賀線も全通。港・ヨコハマにも鉄道は張り巡らされてゆくのである。それは、何よりも各地からの物資を港に運び船に積む、また船荷を鉄道に積み替え、各地に運ぶ新たな物流システムの確立なのである。

もうお分かりであろうか？港だけではなく、鉄道がなければヨコハマの発展はなかったのだ。だから大きな声で「港・鉄道・ヨコハマ」そして何よりもこのシステムで運ばれた物資の中心が生糸だったのである。東北、関東甲信越方面から鉄道を使って大量の生糸が横浜港に運ばれ、船積みされ欧米に旅立って行ったのである。一時は世界の生糸市場の約７割のシェアを日本国の生糸が占めていたのだ。鉄道なくしてこの業績は語れないのである。

そこで、「港・ヨコハマ」でどうしても抜けてしまう鉄道の市民権を大いにアピールするべく当公社団では、「港・鉄道・ヨコハマ」プロジャクトを３年前から推進し、横浜市内に現存する近代化遺産としての鉄道遺産の調査、ブックレットの作成、講演会、シンポジウム、見学会等をおこなっている。

ぜひ、ご支援、ご協力をお願いいたします。

公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマ　ヘリテイジ）
常務理事　　米山淳一



ヨコハマヘリテイジブックレット２

我が国初の溶接とリベットを併用した「瑞穂橋梁」

● レポート目次

・シルクの国：佐滝　剛弘（高崎経済大学特命教授・NPO 産業観光学習館特任講師） 08
・シルクの文化を活かした地域づくり：脇坂　隆一（国土交通省東北地方整備局東北国営公園事務所々長） 09
・蚕糸研究の神様「平塚英吉」　HIRATSUKA EIKICHI：武田　一夫（新庄市教育委員会教育長） 10
・絹産業遺産と新庄市旧蚕糸試験場：後藤　治（工学院大学教授） 11
・山形県新庄市旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）：
加藤　明（山形県新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室） 14
・新庄の近代産業の発展を支えた石川組製糸場：加藤　明（山形県新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室） 15
・鶴岡シルクタウン・プロジェクトの取組み～鶴岡シルクの伝統を未来へ～：
田中　尹（元鶴岡織物工業協同組合理事長） 16
・国指定史跡「松ヶ岡開墾場」　山形県鶴岡市羽黒町松ヶ岡：田中　和夫（東京都立田無工業高等学校） 17
・横手市増田伝統的建造物群保存地区：石田　正明・佐藤　豊（横手市まちづくり推進部） 20
・わがまちの絹文化遺産　埼玉県入間郡豊岡町（現入間市）旧石川組製糸西洋館ができた頃：
染井 佳夫（「石川家の人々」を読む会会長） 21
・埼玉県の事例・・秩父・日高・川越　養蚕文化を伝える埼玉の神社と市民団体の取り組み：
藤井　美登利（さいたま絹文化研究会事務局・NPO 川越きもの散歩代表） 22
・旧蚕糸試験場日野桑園第一蚕室の国登録文化財としての保存と活用を目指して：中山　弘樹（日野市教育委員会） 24
・横浜山手西洋館の絹とのかかわりと、近年のあらたな取り組みについて：
堀内　貴雄（公益財団法人　横浜市緑の協会） 25
・津久井のシルク遺産　旧神奈川県蚕業取締所中野支所を巡って：鈴木　智恵子（エッセイスト・日本文藝家協会々員） 27
・群馬県養蚕民家と集落Ⅱ：中村　武（NPO 法人 街・建築・文化再生集団） 29
・JA 前橋市大胡稚蚕人工飼育所：村上　雅紀（上州文化ラボ） 30
・近代製糸業とキリスト教：藤岡　一雄（キリスト教研究者） 32
・シルクロード・ネットワーク・横浜フォーラム 2015「シルクでつなぐ街と人」　記録 33

● 6 月 25 日（土）「シルクロード・ネットワーク　新庄フォーラム２０１６」

会　　場　新庄ニューグランドホテル

13:00　開会挨拶　公益社団法人横浜歴史資産調査会　米山　淳一
NPO 法人街・建築・文化再生集団理事長　星　和彦
来賓挨拶　新庄市長　山尾　順紀様

13:20　【基調講演】「世界につながる日本の絹遺産」　佐滝　剛弘さん（高崎経済大学特命教授、NPO 産業観光学習館特任講師）
【基調講演】「シルクの文化を活かした地域づくり」 脇坂　隆一さん（国土交通省東北地方整備局東北国営公園事務所々長）
【基調報告】「蚕糸研究の神様　平塚英吉」　武田　一夫さん（新庄市教育委員会教育長）
【基調報告】「旧蚕糸試験場新庄支場の調査報告」後藤　治（工学院大学教授・RAC 理事）

16:00　事例報告：地域の絹遺産と活用とこれから
報 告 者：鶴岡市・横手市増田・川俣町・入間市・川越市・日野市・横浜市・相模原市・前橋市他

17:45　総括・閉会　米山　淳一・星　和彦

18:30　交 流 会　新庄ニューグランドホテル

● 6 月 26 日（日）新庄市史跡巡りと「原蚕の杜」見学会

09:30　新庄ニューグランドホテル出発－旧国鉄新庄機関庫－新庄城址（市史跡）－新庄ふるさとセンター－国登録有形文化財・旧農林省積雪地方農村経済調査所－国重要文化財旧矢作家住宅

12:00　新庄エコロジーガーデン「原蚕の杜」にて昼食

13:00　新庄エコロジーガーデン「原蚕の杜」見学

14:00　国指定史跡・新庄藩主戸沢家墓所

14:45　新庄駅解散

シルクの国

佐滝　剛弘（高崎経済大学特命教授・NPO 産業観光学習館特任講師）

群馬、長野、福島、横浜、京都・西陣……日本には、生糸が地域の主要な産業であったことが比較的よく知られる地域がある一方で、思わぬ地で生糸の歴史の名残と出会うということが往々にある。

2016 年の大型連休、国の登録有形文化財を求めて、滋賀県長浜市を訪れたときのこと。最近登録された「ふじ石亭」という料亭が市街地にあるというので、車を走らせた。住宅街の一角、長浜市立図書館の向かいに、溶岩を積み上げたような巨壁に覆われた建物が現れた。ここがお目当てのふじ石亭であった。建物の外回りだけでも見たいのだがと申し出たら、女将が「今はまだ誰もお客がいないので、ご案内しましょう」と、快く室内を見せてくれた。その際にこの邸宅の謂れを書いた説明書をもらい、目を通して驚いた。

ここは、以前は農業機械やボートのエンジンなどの製造で知られるヤンマーディーゼル（現、ヤンマーホールディングス）の社長が所有していたこと、さらにそれ以前には、下郷伝平という長浜の実業家が建てた別邸だったことが書かれていた。驚いたのは、ヤンマーのほうではなく、下郷伝平という名前である。下郷は、明治 26 年、官営富岡製糸場が民間に払い下げられる際の入札で、応札した５人のうちの１人だったからである。長浜は江戸時代から絹織物が盛んで、「浜縮緬」の名で出荷されていた。下郷は長浜の有力な製糸家のひとりで、のちに長浜町長や貴族院議員も務めた名士である。伝平は、実は二代目で初代伝平の長男。この邸宅は昭和 17 年に、ヤンマーの創業者山岡孫吉の手に渡り、長らく会社の施設として使われたとのことである。富岡製糸場の入札では、三井が最高額をつけて落札し、富岡製糸場は三井の経営となったが、もしかしたら長浜の製糸家が所有したかもしれないのだ。

シルクの遺構は、なにも製糸場や養蚕農家だけではない。生糸を生産し輸出することで、富国強兵と地域振興に貢献した蚕糸業は、こうして 21 世紀になってもあちこちにその残滓をとどめているのである。

富岡製糸場は、払い下げ以降の民間三社の発祥の地や本社所在地も、歴代の工場長の出身地もすべて群馬県外である。その意味で、富岡製糸場は群馬県のもののように見えて、実は全国各地と密接なつながりがある。養蚕・製糸の痕跡をたどれば、世界遺産「田島弥平旧宅」のコピーと見まがうような建物が残る鶴岡市の松が岡開墾地の例を出すまでもなく、山形県もシルクネットワークの重要な一端を占めていたこともわかる。山形鉄道フラワー長井線に「蚕桑（こぐわ）」駅があるのもその象徴的事例である。

このフォーラムが貴重なシルクの資産である「旧農林省蚕糸試験場新庄支場」（国登録有形文化財）がある新庄市で開かれ、そこに参加できるのは、シルクファン、登録有形文化財ファンの私には、きわめて喜ばしい経験となろう。

ふじ石亭　　写真：佐滝　剛弘

シルクの文化を活かした地域づくり

脇坂隆一（国土交通省東北地方整備局東北国営公園事務所々長）

１． 歴史、文化を活かしたまちづくり-その仕組みとポイント-

生糸は、我が国の近代を支えた主要産業であり、桑の栽培、養蚕から製糸工場まで、富岡製糸場の世界遺産登録だけではない広がりがあり、そこでのこれまでの投資の現れとしての建造物が重要文化財に指定されたり、絹産業で栄えた町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定されたりしている事例もみられる。

しかしながら、絹産業自体は衰退しつつあるなか、これらの建築物をそのままの機能で維持することは極めて困難である一方で、これら文化財をまちの個性、資源としてとらえ、積極的に活用している市町村も現れている。

このような取り組みは文化財部局だけでは困難であり、まちづくり部局と文化財部局が同じ目標の下に連携し、市民や学識経験者を巻き込んで取り組んで行くことが不可欠である。この取り組みを支える仕組みが平成 20 年に制定された歴史まちづくり法である。これは有形・無形の歴史的資産が一体となった概念である「歴史的風致」を設定し、これを維持向上する「歴史的風致維持向上計画」を市町村が策定、国土交通省、文化庁、農林水産省が認定することにより、認定計画に基づく各種支援が受けられるものであり、平成 28 年 6 月 1 日現在で全国 56 都市が認定されている。

２．生糸の文化を歴史まちづくり計画に活かした事例（群馬県甘楽町、山形県鶴岡市）

歴史まちづくり法認定都市の中で、現在は生糸産業がないが生糸産業で栄えた養蚕農家郡が今も残る群馬県甘楽町があげられる。ここは織田家の城下町で、名勝楽山園が有名であるが、一方でぐんまの絹遺産として日本遺産にも選定された旧小幡組煉瓦倉庫が残されている。ここではかつて養蚕も行われていた町屋「信州屋」を法に基づく歴史的風致形成建造物として指定し、絹産業も含めた観光案内所として活用するなど多くの取り組みを実施し、富岡製糸場との関係の中で多くの観光客が訪れ、歴史のある町としての知名度を急速に向上させている。

さらに、生糸産業そのものを地域おこしに活用している事例としては山形県鶴岡市が上げられる。ここは庄内酒井藩の城下町の風情が今に残り、藤沢周平の歴史小説の舞台としても取り上げられるが、一方で戊申戦争後、朝敵とされた庄内藩士が松ヶ岡地区を開墾し桑栽培を始め、現在でも養蚕から製糸・製織など絹製品生産の一貫した工程を有する国内唯一の地域として産業が残されており、国指定史跡として松ヶ岡開墾場を保存活用するとととともに、絹織物工場跡を鶴岡まちなかキネマとして映画館に再生するといった取り組みも進めている。

甘楽町　信州や

旧甘楽社小幡組 繭倉庫

鶴岡市　史跡松ヶ岡開墾場の中に残る蚕室

蚕糸研究の神様「平塚英吉」　HIRATSUKA EIKICHI

武田　一夫（新庄市教育委員会教育長）

平塚英吉は、明治２１年（1888)、新庄町（今の新庄市）小田島町に生まれた。平塚家は新庄藩の下級藩士で、父英次郎は、戊辰戦争後、他の多くの藩士たちが明治という新しい時代を生きぬくため、職を求めて上京する中で地元に踏みとどまり、教員や町の収入役を務めた。英吉が生まれたのは､新しい時代がはげしく動いているときだった｡しつけの厳しい家だったが、末っ子のためか父母は英吉にあまかった。そのため、小学校に入学したばかりのころは、毎日泣かされて帰ってきた。

兄広義は、英吉より１３歳年上で、東京大学政治学科を卒業して、東京府知事（今の都知事）になった秀才であった。英吉は体もあまり丈夫でなく、勉強もあまりできなかった。そのため兄と比べられるのが英吉にはおもしろくなかったが、３年生になると英吉に変化があらわれ、器械体操はもちろん、柔道や剣道などのスポーツに熱中するようになった。そして、その上達とともに勉強の成績も上がってきた。

新庄中学校（今の新庄北高）に入学すると、学力がめきめき向上しはじめた。３年生になると、とくに成績がすぐれた生徒がなる特待生になった。しかし、その年、父がインフルエンザにかかり、五十三歳で急死。一家の大黒柱を失った平塚家を、大学を出たばかりの兄広義が継ぐことになった。広義は、栃木県庁に勤めたばかりであったが、中学生の英吉を宇都宮に呼び寄せた。父を失った英吉は、エリート官僚の兄のもとでますます勉学とスポーツに励んだ。兄広義が秀才型なら、弟の英吉は努力型だった。英吉は、宇都宮中学校（今の宇都宮高校）から、兄と同じ旧制第二高校へ入学した。中学では野球を、高校ではボートをこいで体を鍛えた。９６歳まで命を長らえることができたのは、文武両道の精神で自分をみがいたからであろう。

英吉の東京大学農科大学への入学が決まると、兄広義は心から祝福してくれた。大学時代の英吉は、常に優等生であった。学生総代を務め、３年生の時は特待生になるなど目立った存在で、教授の鈴木梅太郎先生には高く評価されていた。鈴木先生がビタミンB1を発見したのは、英吉が在学中のことである。その鈴木梅太郎との出会いが、英吉の将来に大きく影響した。成績が優秀で、研究熱心な英吉は世界的な研究者になれると鈴木先生は、自分の研究室で助手として一緒に研究するように進めた。英吉は１年間みっちりと手ほどきを受け、研究者としての基礎を学んだ。

明治４５年（1912)、英吉は新しく設置された国立蚕業試験場の主任研究員になった。このころの日本は、富国強兵政策のもと、工業に力を入れていたので、生糸の生産高が中国を抜いて世界第１位になっていた。そのために蚕糸業は、国にとって最も重要な産業であった。英吉の蚕糸の研究が本格的にはじまった。英吉は、地道だが確実な実験により、次々と新しい発見をしていった。そして遂に世界で初めて絹糸ができあがる仕組みを明らかにした。その後、新たな研究課題に取り組むため、イギリスオックスフォード大学に留学。大正１０年（1921)、英吉は大きく成長して帰ってくる。まもなく結婚して女の子が生まれ、幸せな家庭を築いた。大正１５年（1926）には、国立蚕業試験場場長と東京大学教授の二つの地位を一度に手にすることになった。英吉、３８歳の時である。その前年に、兄広義は東京府知事になっていたので、兄弟揃っての大出世であった。

英吉は、東京大学教授を昭和２３年（1948）まで、蚕業試験場長は昭和２５年（1950）に農業技術研究所長になるまで、長年にわたって研究一筋に勤め上げた。その間、「蚕業試験場支場」の新庄への誘致・開設に尽力した。

昭和４６年（1971)、蚕糸研究の業績が認められ、文化功労者に選ばれた。新庄市出身者ではかつてないことだったので、名誉市民第１号となった。しかし、この最高の名誉を手にしても英吉の研究心は休むことをしらなかった。

英吉は、昭和５９年（1948)、９６歳の生涯を閉じた。しかし、その名は郷土の人材を育成する「平塚英吉賞」に長くとどめられている。

絹産業遺産と新庄市旧蚕糸試験場

後藤　治（工学院大学建築学部建築デザイン学科教授）

全国ｼﾙｸﾛｰﾄﾞﾈｯﾄﾜｰｸ

In　山形県新庄市

絹産業遺産と新庄市旧蚕糸試験場

2016 年 6 月 25 日

工学院大学建築学部
建築デザイン学科
教授　後藤　治

旧蚕糸試験場について

蚕糸試験場は、農林水産省(旧農林省)の付属機関のひとつ。
養蚕および製糸に関する調査・研究と原蚕種の育成と保存を行うため、昭和初期に全国 11 か所に配置された。

時代とともに生糸産業から人造繊維産業に代わり、試験場の需要 は衰退。昭和後期以降に多くの試験場が閉所した。
庁舎や蚕室をはじめとした建築の意匠は、旧農林省による標準様式に則ったものであり、各支場に類似した意匠が見られる。

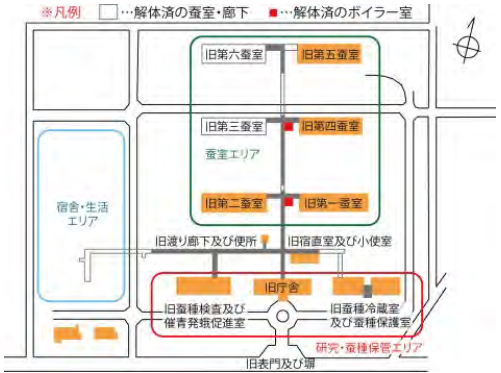
宮崎支場 庁舎

明石支場 庁舎

新庄支場について

新庄支場は昭和 9 年に開所し、約 10ha の広大な敷地面積を活かし、戦中から戦後にかけて一貫して蚕糸業の発展に寄与した。
全国の蚕糸研究機関のうち、敷地と複数棟を残す唯一の施設。
平成 12 年の閉所後は、市の所管になり、
「産直まゆの郷」、「kitokitoMARCHE」などの活用を中心に、市の憩いの場として活用されている。
平成 25 年 3 月 29 日に登録有形文化財に登録。

新庄支場について



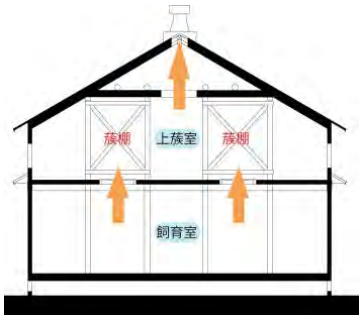
旧第一蚕室

竣工年：昭和 10 年 10 月　建築面積：331 ㎡ 木造二階建て一部地階付、切妻造、鉄板葺。
棟には換気塔が付く。外壁は一階が鎧下見板張、二階が漆喰塗。
ボイラー室を利用した春・晩秋用蚕室である。

旧第二蚕室

竣工年：昭和 12 年 3 月　建築面積：306 ㎡
二階建、切妻造、鉄板葺。
棟には換気塔が付く。外壁は一階が鎧下見板張、二階が漆喰塗。
比較的気温の高い時期に稼働する夏用蚕室。

蚕室に共通する構成



蚕室　梁間断面図

開閉式換気口

蚕室ごとの違い　2階上簇室について

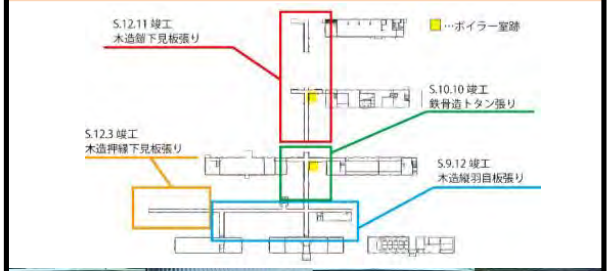
第一蚕室

第二蚕室

第四蚕室

第五蚕室

竣工年代で異なる渡り廊下の意匠



◇国際機関による産業遺産の定義

TICCIH：The Nizhny Tagil Charter for The Industrial Heritage の定義（2007 年 3 月）

1　製造拠点となる施設
2　原料の産地の施設（例：炭鉱、鉱山、採石場他）
3　動力供給の施設（例：水力、電気他）
4　交通関連の施設（例：運河、道路、鉄道、灯台他）
5　関連する港湾
6　労働者のための住宅、学校、寺院、庭園、娯楽施設等
7　産業資本家（創業者、経営者他）の家
8　産業労働者の食料供給のために使われた農地
9　伝統芸能、民族音楽、郷土料理、祭り

大事なものは、構造物や施設だけか？

産業と関わりが深いもの ／ 機械類、 製品、 発明 メーカー（製造）

山形県新庄市旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）

加藤　明（山形県新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室）

旧農林省蚕糸試験場新庄支場は、昭和９年に「蚕業試験場福島支場新庄出張所」として発足。施設の建設が進められて昭和１１年より事業を開始しました。その後、昭和１２年に「蚕糸試験場新庄支場」、昭和３３年に「蚕糸試験場新庄原蚕種製造所」、昭和４３年に「蚕糸試験場新庄原蚕種試験所」と改称を重ね蚕種の研究や桑の栽培等、戦中から戦後にかけて一貫して蚕糸業の発展に寄与してきました。

この施設は、国の行政改革により昭和５８年５月、「蚕糸試験場蚕育部原蚕種第一研究室及び農業生物資源研究所遺伝資源部保存法第二研究室」に改組され、幾度の組織改変の後、「東北農業試験場畑地利用部畑作物栽培生理研究室」を最後の名称として平成１２年３月に閉所されました。その後、平成１４年２月、新庄市に譲渡され、同年８月から「新庄市エコロジーガーデン」として蚕糸研究の歴史を紹介するとともに、自然環境を学び、交流の場を提供する施設として活用してきました。平成２５年３月２９日に庁舎や蚕室、廊下等を含めた建造物１０件が登録有形文化財（建造物）として登録されました。

■開園時間　午前 9 時 午後 5 時

■入園料　　無料

■休園日　　火曜日、年末年始

■施設情報　〒 996-0091　新庄市十日町 6000-1

電話 0233-29-2122　Mail　ecology-g@ic-net.or.jp

新庄の近代産業の発展を支えた石川組製糸場

加藤　明（山形県新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室）

当地方の製糸・織物業は、藩政時代の家中の副業として興り、明治初期の士族授産政策によって新庄を中心として栄え、さらに明治前期から後期にかけては、特に製糸業が生糸の外国輸出の増加を反映して、新庄町はもとより近隣の山間の村々まで広まった。明治１０年代においては、当地方の絹織物は県内他地方からも大いに注目されていた。明治１７年、山形で開催された物産共進会に各地からさまざまな物産が出展されたが、織物については、最上郡からの出品が最も多かったという。この共進会のことを報じた同１７年１１月２８日の『山形新聞』に「各郡諸織物陳列中、最上郡は最も品多にして、多くは新庄旧藩士よりの出品なり」として八橋織・畦織・武田綾・亀綾織等々品数６０余が出品されたと記している。

明治中期から後期にかけて製糸工場が続々と設けられるようになり、なかでも近代産業化の礎となったのが、石川組製糸場の操業である。石川組製糸場は新庄町の石川弥五郎が興した工場である。明治３７年７月、新庄町小田島（現新庄中学校校庭辺）にて操業を開始。従来の製糸場と違い、蒸気（４馬力の機関１）を原動力とし、職工数５８名を擁し、製糸釜数５２個、年間執業日数１５０日、一日執業時間１２時間という大規模なものであった。従来の生産方式とは異なる新しい生産方式を採用したいわば最初の工場制工場ともいうべき存在であった。同４１年３月には、同じく石川弥五郎が石川織物工場を創業。従業員数２１人、年間執業日数１５０日、一日執業時間８時間の工場である。

このように時代の先端をいく工場ではあったが、昭和２年に始まる不況により経営困難となり同６年に閉鎖した。明治時代の後半期は製糸・織物に限らず、諸産業の各分野において組合や会社が創立された時代であった。この背景には、日清、日露戦争の勝利による経済界の好況、さらに奥羽本線開通（明治３６年新庄駅開設）があったことはいうまでもない。

■新庄亀綾織

新庄の伝統の絹織物「新庄亀綾織（かめあやおり）」。新庄藩９代藩主戸沢正胤（まさつぐ）が文政１３年（１８３０）に技術者を招き、藩の特産品として奨励したのが始まりです。

明治末期に生産が途絶え ” 幻の織物 ” と呼ばれていましたが、昭和６０年（１９８５）に新庄亀綾織伝承協会が発足し「紗綾形」「八つ橋織」などの復元に成功。その後も織の復元と伝承活動を続け、現在では 20 種類以上の折り目模様がある。亀綾織は織り上げてから染色するため、しっとりした風合いと光沢が特徴で気品のある色が美しい織物としておみやげや贈り物にも喜ばれています。

平成１３年（２００１）に新庄駅前通りに体験工房「機織り長屋」を開設。見学も自由で、展示販売もしています。

■新庄亀綾織伝承協会「機織り長屋」

■開館時間　午前 10 時 午後 5 時

■休館日　毎週水曜日、年末年始

■入場料　見学無料

■体験料　1,000 円

■施設情報　〒 996-0023　新庄市沖の町 10-8

電話 0233-22-0025

鶴岡シルクタウン・プロジェクトの取組み
～　鶴岡シルクの伝統を未来へ　～

田中　尹（元鶴岡織物工業協同組合理事長）

鶴岡シルクタウン・プロジェクトは、鶴岡市の近代化の礎となった養蚕、絹織産業の伝統を保存・伝承するとともに、その伝統を活かして絹織産業の新たな可能性を啓き、地域を活性化することを目指す事業であります。

鶴岡では、平成 21 年からこのプロジェクトに着手し、平成 24 年度には新たな指針となる「鶴岡シルクタウン推進プラン」を策定し、関係部署と関係者が緊密に連携し事業の推進を図っております。このプランは、全国で唯一残っている絹織の養蚕・製糸・精練・捺染(なっせん)・縫製の一貫生産工程の価値を活かしながら、養蚕・絹織の伝統を文化面と産業面で捉え直し、それぞれの観点から振興策を展開する方針のもと事業を実施しております。以下、文化面事業について報告いたします。

文化面における事業につきましては、絹織の歴史文化を次世代に伝えるための普及啓蒙に資する施策として、幼稚園・保育園・小中学校及び福祉施設などに「蚕の飼育キット」を配布し、飼育体験を行う事業を実施しております。

28 年度は、46 の施設、約 1,000 名の幼児、児童が蚕飼育体験を行いました。事業実施にあたっては、養蚕指導普及員のＯＢの方々から各施設を巡回していただき、蚕の飼育管理指導だけでなく、絹織の歴史や蚕の吐いた糸が布となる絹織工程もあわせて紹介していただいております。

また、鶴岡中央高校の総合学科家政科学系列被服系の生徒で結成しているシルクガールズのプロジェクトは平成 22 年に立ち上げし活動していただいております。自ら鶴岡の絹を学ぶことにより、地域を元気にする活動ができないか、また鶴岡の絹を未来につなげていきたいという生徒の熱い思いから行われており、自らが企画・運営し、鶴岡シルクや飼育体験で集めた繭(まゆ)から糸をとり、それらを織って作られた純鶴岡産の絹素材布(ぬの)でのファッションショーを毎年開催し、好評を博しております。25 年度からは蚕の飼育体験をした子供たちや車椅子にのったお年寄りもモデルとなり、それらを見守る観客までもが笑顔あふれるショーとなり、幅広い市民各層から鶴岡シルクに親しんでもらう契機となっております。

飼育体験の授業風景

ｼﾙｸｶﾞｰﾙｽﾞのﾌｧｯｼｮﾝｼｮｰ

国指定史跡松ヶ岡開墾場　　山形県鶴岡市羽黒町松ヶ岡

田中　和夫（東京都立田無工業高等学校）

■松ヶ岡開墾場について

1872（明治５）年、戊辰戦争に敗れた旧庄内藩の中老で、当時は酒田県権参事だった菅実秀（すげ　さねひで）が、士族救済ならびに国の近代化に貢献するため、月山山麓の「後田山」と称した山林荒蕪地を開墾し、大規模な養蚕製糸業を興すことを発案。旧藩士 3000 人が、刀を鍬にかえて開墾したのが、松ヶ岡開墾場です。

写真１　松ヶ岡開墾記念館（旧１番蚕室）

松ヶ岡という地名の由来は、旧藩主酒井忠發公が開墾に従事する旧藩士を激励に訪れた際、木札に「松ヶ岡」と揮毫し経塚丘上に立てたことによるとされています。明治６年からは茶の栽培・桑園開発を始めるとともに、７年までに計 311 ヘクタールに及ぶ広大な山林荒蕪地の開墾を成し遂げました。なお、菅実秀は、松ヶ岡開墾場をはじめ、第六十七国立銀行（荘内銀行の前身）、酒田米穀取引所（山居倉庫）、松岡製糸所などの事業を興しています。西郷隆盛と深い親交があり、西南戦争後、「南洲翁遺訓」を刊行しています。

写真２　松ヶ岡開墾記念館内部

1989（平成元）年、国の史跡に指定された当地内には、庄内藩主が参勤交代の際に使用していた御茶屋を移築して開墾事業の本陣とした建物や、蚕業稲荷神社（明治８年移座）、そして明治８～10 年に建てられた蚕室 10 棟のうちの５棟が現存しており[注1)]、松ヶ岡開墾記念館や庄内農具館、食事処、庄内映画村資料館などに利用されています。

幾多の困難を乗り越え、子孫によって継承・経営された創業の精神を、開墾当時の雰囲気とともに今に伝えています。

■松ヶ岡開墾場の蚕室と上州島村とのつながり

1874（明治７）年４月から７月にかけて、酒田県士族 18 名が養蚕業の先進地であった上州・群馬県佐位郡島村（現：群馬県伊勢崎市境島村）の田島弥平・武平両家を訪れ、養蚕伝習を受けました。同年 10 月、松ヶ岡の東側で蚕室の建設にとりかかり、上州島村式の３階建蚕室４棟が翌８年４月に完成し、５月から養蚕が始まりました。さらに翌９年５月には前年と全く同じ構造・規模の蚕室４棟を建てるとともに製糸を開始、同 10 年５月には旧藩時代の厩舎の古材を利用して平屋建蚕室２棟を建設しました。同年の春蚕は、10 棟全ての蚕室で飼育したそうです。

写真３　大蚕室が建ち並ぶ松ヶ岡（明治９年頃撮影）

１番から５番まで現存している蚕室は、田島弥平旧宅にあった新蚕室をモデルに、ほぼ倍の規模で建てられています。桁行 21 間（37.8m）・梁間５間（９m）・高さ５間４尺（10m）で、２階の上には通風換気のためにさらに越屋根を取り付け、屋根には明治８年に取り壊された鶴岡城の瓦が使われています。建築は鶴岡出身の大工棟梁、高橋兼吉[注2)]によるものです。

田島弥平旧宅の新蚕室は、「清涼育」の理論に基づく蚕室で、明治 12 年の『続養蚕新論』巻之二「新築蚕室之図」で示されています。現在その建物はなく、石垣のみが残っていますが、松ヶ岡開墾場の蚕室群は、上州島村式蚕室の伝播を知る上でも、大変貴重なものと言えます。

写真４　新築蚕室之図『続養蚕新論』

写真５　田島弥平旧宅の新蚕室跡

■近代化産業遺産としての松ヶ岡開墾場

写真６　庄内映画村資料館（旧５番蚕室）

松ヶ岡開墾場は、2009（平成 21）年２月、経済産業省の「近代化産業遺産群　続 33」のひとつに認定されました。鶴岡市では、国指定史跡・松ケ岡開墾場の保存、継承を目的に、史跡内の大蚕室５棟（延べ床面積計約 3500 ㎡）、木造２階建ての旧寄宿舎（同約 350 ㎡）、史跡指定エリアを中心とした土地約 2.4 ヘクタールを買い取り、文化庁が 2015 年度に創設した「日本遺産」認定に向けた取り組みを強化し、伝統の絹産業による地域振興を目指す「シルクタウン・プロジェクト」の中心的な施設として活用していく方針を明らかにしています。山形県内はもとより、全国的に見ても、養蚕業の近代化を伝える貴重な絹産業遺産であり、今後の保存活用計画が期待されます。

注

注１）　現存以外の５棟については、以下のような変遷を辿っている。

1884（明治 17）年　前年に焼失した鶴岡朝暘学校の校舎として、８番蚕室を寄付。残念ながら 1936（昭和 11）年に焼失。

1884（明治 17）年８月　暴風のため平屋建蚕室２棟(9 番、10 番)倒壊。

1934（昭和　9）年９月　松岡製糸所松嶺工場へ７番蚕室を移築。

1935（昭和 10）年 9 月　鶴岡市新海町に絹織物工場建設のため６番蚕室を移築。

写真７　庄内農具館（旧４番蚕室）

注２）　高橋兼吉（たかはし かねきち）　1845（弘化２）年～1894（明治 27）年

大工棟梁。庄内藩では普請係を務め、明治に入ってからは松ヶ岡開墾場蚕室の建築後、横浜で洋風建築の技術を学び、初代山形県令三島通庸の施策に基づき、東・西田川の両郡役所や旧鶴岡警察署庁舎、大山小学校など、現在庄内地方に現存する、数多くの擬洋風建築を手掛けた。他にも善宝寺五重塔や荘内神社など

の社寺建築、酒田市にある山居倉庫なども手掛けており、まさに庄内を代表する大工棟梁である。

写真８　旧西田川郡役所

写真９　旧鶴岡警察署

写真 10　山居倉庫

参考文献

１）　山形夏の旅　Be Extra TRAVEL　朝日新聞別刷り特集、2004 年 6 月 27 日

２）　山形県商工観光部　産業政策課　「山形県の近代化産業遺産群」パンフレット

３）　武山省三「松ヶ岡開墾百年の歩み」社団法人丕顕会、1988 年３月 31 日

４）　鈴木芳行「蚕にみる明治維新　渋沢栄一と養蚕教師」吉川弘文館、2011 年９月 20 日

横手市増田重要伝統的建造物群保存地区

石田　正明（横手市まちづくり推進部歴史まちづくり課）
佐藤　豊（横手市まちづくり推進部増田地域課）

横手市増田伝統的建造物群保存地区
（撮影　杉本　和樹）

平成 25 年 12 月に重要伝統的建造物群保存地区に選定された「横手市増田伝統的建造物群保存地区」（以下「保存地区」という。）は、秋田県の南部、横手市に所在します。増田は市の中心部より約 12 キロメートル南にあり、奥羽山脈を源とする成瀬川と皆瀬川の合流点の北に位置しています。

保存地区は、羽州街道上の十文字から仙台藩領寒湯（宮城県栗原市）へ抜ける小安街道上にあり、近世より久保田藩南部の流通拠点として発展を遂げた在郷町です。保存地区の南端で手倉街道に分岐し、現在の東成瀬村を経由して、いわゆる水沢伊達氏領水沢（奥州市水沢区）に抜けます。通りに沿って切妻造妻入を主とする主屋が軒を連ね、その背面に鞘付土蔵が接続し、この土蔵部分は当地では「内蔵（うちぐら）」と呼ばれます。敷地の半分以上を占める主屋と鞘付土蔵は、正面から裏口まで直線状に延びるトオリドマを南側に設け、奥行 50 メートルにも達する長大な内部空間を作り出しています。

増田の養蚕業は、近世末より盛んとなり、明治に入り生糸や繭は最大の移出商品となりました。増田の商人は東西成瀬村などの養蚕農家に蚕卵紙や桑葉などの生産資材や生産資金を貸し与え、農家は繭や生糸で返済するという関係が成立していました。この関係は昭和前期まで継続しますが、商人はこうして買い求めた商品の仲買人としてその商域を拡大し、増田の発展に寄与したとされます。

明治 42 年（1909）には「平鹿郡立農事講習所」が設置されるなど、養蚕農家の育成にも大きく寄与した増田ですが、養蚕業は大正の終わりをピークとして、昭和前期の経済恐慌や化学繊維の登場によって急速に衰退していきます。当時を伝える遺構は数が少ないものの、近世からの養蚕供養塔が町内各地に点在するほか、蚕の孵化調製施設である旧農事講習所地下冷蔵庫（大正 8 年竣工）などがわずかにその姿をとどめています。

町内に残る養蚕供養塔（嘉永 3 年）

旧農事講習所地下冷蔵庫（明治 29 年頃）

わがまちの絹文化遺産
埼玉県　入間郡豊岡町（現 入間市）旧石川組製糸西洋館ができた頃

染井 佳夫（「石川家の人々」を読む会会長）

八王子市に向かう国道１６号線を車で川越・狭山両市から入間市に入ると、壮麗な西洋館が左窓にその偉容を見せる。明治から昭和にかけて全国に９工場他を展開した、埼玉を代表する製糸企業石川組の旧迎賓館である。

■石川幾太郎による創業

安政2（1855）年、黒須村に生まれた石川幾太郎は、成長後の明治10年代に茶業では失敗したものの、徐々に生糸の売買や製造（糸挽き）に関心を高めて、明治26（1893）年、幾太郎は座繰り挽きによる製糸工場を開き、翌年には器械製糸に転換した。3間×8間、36人繰り，釜数20余という小さな工場と他工場の不要機器購入によって堅実に発足した幾太郎だったが、日清戦争をはさんだ明治27（1894）～明治28（1895）年には約１万円という高い収益を上げ、工場を増床するとともに釜数を100に増やし、工女も甲州等から増募することとなった。弟和助の熱心な伝道を受けて父金衛門と自らも受洗していたこと、明治22（1889）年の豊岡町発足にともない町会議員に選出されていたこと等が幾太郎の視野や人脈を広げていたことは想像に難くない。

■県内～全国への工場展開

創業８年後の明治35（1902）年、幾太郎は町内の鍵山に「新家（しんや）工場」（第二工場）を釜数100で開設し、責任者にはすでに結婚・分家していた弟の四男龍蔵をあてた。龍蔵は横浜の生糸売り込み商田中商店との交渉役を果たし、的確な情報を幾太郎にもたらし、石川組製糸にとっての戦略参謀として活躍した。

その後、明治40（1907）年には“Minorikawa Silk”としてアメリカでも高い格付けの生糸を産していた御法川直三郎より川越工場を購入（弟・五男仁平が工場長）して操業を開始、明治44（1911）年には本店，新家，川越の三工場合計で釜数985となり、年間生糸生産量も10万5千斤（約63ｔ）となった。陸軍関東大演習で来県した大正天皇の勅使・海江田侍従より川越工場で「邦家蚕糸業の為、益々勉励せよ」と伝達されたのは翌大正元年11月16日である。

不安定な業種であったにもかかわらず第一次世界大戦による好景気の波に乗り、石川組は戦後の不景気も乗り切って好調な業績を続けた。大正4（1915）年には入間川工場（第四工場）と福島県原ノ町工場を稼働させ大正6（1917）年に扇町屋工場（第五工場）と次々に規模拡大を図った。蚕種冷蔵用の製氷や保温材事業から工場の糧食自給のために農・畜産・醸造（味噌他）・精米等傍系事業にも進出している。

■社会貢献にも注力した大正期から株式会社解散まで

△石川幾太郎

大正６（1917）年緑綬褒章を受けた幾太郎は、その後業績の向上に努力しながら、県立蚕糸学校（県立川越農業高校＝現川越総合高校の前身）の建設資金として１万円の寄付をした他、地元の豊岡小学校に雨天体操場建設、県立盲学校への資金援助等社会貢献活動にも力を入れている。これらは、弟（三男）和助を中心に起草され明治45（1912）年５月１０日に一族で誓約・署名された「家憲・家訓」の趣旨に沿うものであった。大正９（1920）年11月1日付けを以て石川組は株式会社組織となった。この年から大正12（1923）年の前半までが、石川組製糸の絶頂期であった。

迎賓館としての西洋館、石川家同族会が1,000坪の敷地と建築資金の半分を提供した豊岡教会、さらには石川組から提供された3,000坪の敷地において豊岡町が全国に先駆けて開講した「豊岡大学」の会場となる豊岡公会堂の建築がいずれも大正１１，２年であったこともそれを裏付けている。

（「さいたま絹文化研究会通信」Vol.７，８掲載の拙稿より抄録）

埼玉県の事例・・秩父・日高・川越　養蚕文化を伝える埼玉の神社と市民団体の取り組み

藤井　美登利（さいたま絹文化研究会事務局・NPO 川越きもの散歩代表）

平成 25 年 2 月、埼玉県の秩父神社、高麗神社、川越氷川神社の宮司たちが、埼玉の蚕糸・絹文化を次代に伝え、発信するための場として、絹文化の研究会を発足させました。その背景には、広く知られないままに消えてゆく国産絹・蚕糸文化への危機感がありました。平成 13 年には 2730 戸あった全国の養蚕農家が平成 23 年には 500 戸を切り、埼玉県内の養蚕農家も同じく 250 戸から 48 戸に激減。日本の絹は流通量の１パーセントを切り、絶滅寸前です。

■３神社の絹との関わり

秩父市の場合、秩父銘仙という織物が全国的にも有名ですが、秩父神社に伝わる国指定重要無形文化財の「秩父神楽」には「養蚕」神事があり、同文化財の例大祭「秩父夜祭」も江戸時代から養蚕守護の信仰にちなみ、絹糸の大取引でにぎわう「お蚕まつり」と称されてきました。１２月４日の例大祭の翌日には、農協や養蚕農家など関係者が参列し「養蚕倍盛祈願祭」が執り行われ、養蚕農家が毎年繭を奉納しています。

日高市にある高麗神社の由来は、奈良時代にさかのぼります。霊亀２年（716）、現在の埼玉県日高市や飯能市を中心に高麗郡が設置され、朝鮮半島の高句麗から渡来してきた人たち、1799 人がこの地に移り住みました。初代郡司には朝廷から従五位下に叙された高麗王若光が就き、没後にその御霊を祀るために高麗神社が創建されました。代々の宮司は若光の子孫が務め、現在の高麗文康宮司は第 60 代目になります。この地から県内に絹織物、紙漉き、麦作、騎馬、土木技術などが広まり、ユネスコ世界無形遺産に指定された埼玉県小川町、東秩父村の細川紙も高麗郡から伝わったといわれています。今年は高麗郡建郡 1300 年を記念する特別な年となっています。

川越は江戸時代、甲州から転封した秋元候の時代に武家の内職として絹織物が推奨され、冬物袴の「仙台平」に対して「川越平」という夏物の袴の産地として有名になりました。川越氷川神社は、華麗な山車行列で有名な国指定重要無形文化財の「川越氷川祭の山車行事」を執り行う神社です。明治２６年の川越大火後に新調された山車は呉服商、織物買継商たちの多額の寄付で再建されたもの。また、明治３８年築の木造長屋作りの織物市場は市民の保存活動の結果、川越市が現地保存を決め、再生活用が検討されています。観光客に人気の蔵造りの建物もその多くは織物商たちが建てたもの。着物姿の似合う町として川越市と観光協会が毎月１８日を「川越きものの日」と制定し、市立博物館や美術館など 100 店舗以上できもの優待がうけられるようになりました。

復原された民族衣装

秩父神社に奉納された埼玉繭

■稲作と養蚕は日本の生業（なりわい）

「神社は人びとの心の結びつきの場であると共に、地域の産業を守る役割もあります。生物資源としての養蚕の価値も知ってもらいたいですね。養蚕を生業にしてきた農家は、秩父だけでなく全国でお蚕さまとして尊んできたのです。これも人々の生活を支える生き物を疎かにしない、日本人の優しい心根のひとつなのです」という同会名誉会長で京都大学名誉教授でもある秩父神社の薗田稔宮司。会長は高麗神社の高麗文康宮司が務め、会の結成を呼び掛けた川越氷川神社の山田禎久宮司が事務局長を務めます。その他、子どもたちのきもの体験などを開催し、繭の地産地消をすすめているＮＰＯ川越きもの散歩、（一社）高麗１３００などの市民団体も協力しています。

現在の主な活動は、絹文化を発信する会報を年３回発行、絹文化関連団体や神社とのネットワーク作り、講演会の開催などを行っています。平成 26 年 3 月には法政大学の田中優子総長による設立記念講演会「日本の絹をめぐる文化」が川越氷川会館にて開催されました。今後は３社共通の繭のお守り作り社の絹ゆかりの資料などの見学会などを開催していく予定です。

さいたま絹文化研究会発足記念講演会

三宮司と田中優子法政大学総長

■ＮＰＯ川越きもの散歩の活動

東京新聞　2013年(平成25年)7月31日(水曜日)　11版　28

920　email t-hatsu@tokyo-np.co.jp　T発

織物で栄えた歴史伝えたい

小江戸が守る絹文化

川越　着物で街歩き、商品開発も

埼玉の小江戸・川越市を「着物が似合う街」に、と女性たちが奮闘している。風情ある通りを着物姿でそぞろ歩き、北関東の織元と連携して新商品を開発。かつて織物で栄えた川越の歴史を次代へと伝える取り組みだ。

黒壁の蔵造りをカラフルな着物が彩った。夏の日差しを受けながら歩くのは、だった。一九一〇（明治四十三）年設立の「川越織物NPO法人「川越きもの散歩」のメンバーたち。二〇市場」が大正初期に閉鎖された。「街の記憶が込められ〇二年の結成以来、着物姿で穴場的な観光スポットを訪ねる会を開いている。しれた後、住宅に使われてきた二棟の木造長屋を解体しっとりとした景観に溶け込む女性たちの姿は、住民にはおなじみの光景だ。

結成のきっかけは、街の記憶が刻まれた建物の危機感。二〇〇一年に浮上した。現在、NPO代表理事を務める藤井美登利さんは保存運動に参加した。

住民主導の運動は実り、市が建物を買い上げて保存活用していくことが決まった。「街の記憶が込められた場所に着物で訪れる人を増やしたい」と、きもの散歩の活動を始めた。

マンションを建てる計画がある藤井さんは保存運動に参加した。

隅田川に至る新河岸川の水運に恵まれた川越は、江戸時代に国内屈指の織物産業集積地となる。幕末に英国製輸入糸を使い低価格で絹のような風合いを実現した縞模様の木綿「川越唐桟」は大ヒットした。消費地と直結する地の利を生かして大量に出荷され、庶民のおしゃれ着として流行する。

明治後期になると、近隣の所沢や入間、飯能などに相次いで繊維工場ができ、川越の地位低下が言われた。「川越織物市場」は、地元商人の起死回生をかけたプロジェクトだった。

市場は、産地と問屋との直接取引が拡大する流れのなかで、閉鎖された。ただ、失敗に終わったとはいえ、織物産業の再興を懸けた挑戦に、藤井さんは重ねる思いもあった。「いま、日本の織物産業は絶滅寸前で、着物好きとしていただけない少しでも貢献し、次世代につないでいきたい」。二年前から、貴重となった国産繭を製品化する事業を始めた。秩父地方で生産される繭「いろどり」を年に百キロ購入して、反物や小物を織るたび「一軒の織元・泉織物には、伝統の「桐生風通織」の製造を依頼した。風通織は軽くてしわになりにくいが、細い糸を使うので手間がかかる。一般的な呉服店では一反数十万円で売られているが、利益を出さないNPOでは十五万八千円で販売する。本庄市の織元には絹を作ってもらっている。これも国産生糸なら一反数十万円が相場のところを十三万八千円で売る。

NPO副代表の五十嵐京子さんは「二、三十年着られる着物はエコでナチュラル。富裕層のためのものになった着物を一般の人のものにしたい」と話す。

小江戸のシンボル、蔵造りは織物で富を成した商人たちが建てた。着物は、街の発展のルーツだ。藤井さんは「着物姿を歴史景観の一部にしたい」と話す。

文・中里宏／写真・高橋ちぐさ／紙面構成・日比忠司

東京新聞記事

旧蚕糸試験場日野桑園第一蚕室の国登録文化財としての保存と活用を目指して

中山　弘樹（日野市教育委員会）

所在地：東京都日野市

昭和３年に始まる旧蚕糸試験場日野桑園は栽桑部と育種部からなり、桑や蚕の品種改良の研究などを蚕室６棟他で行なっていました。昭和54年に閉鎖されると多くの建物が解体されました。現在唯一残るのが、昭和７年に建設された第一蚕室です。鉄筋コンクリートの１階は洋風の窓や漆喰装飾に和風の建具を取り付け、木造のトラス構造の２階が乗るという和風と洋風が混交した建築物です。

第一蚕室他日野桑園に残る遺構の重要性は、その保存活用を求める市民団体「仲田の森遺産発見プロジェクト」の調査や見学会などの地道な活動を通して、次第に知られるようになりました。平成２６年３月には市が第一蚕室の所有権を取得し、今年度には国の登録文化財への申請や保存活用計画の立案を行ない、今後保存活用計画に基づいて、改修も進めていく予定です。

現在、周囲一帯は「仲田の森蚕糸公園」として整備されています。桑園時代からの緑や水路に加え、市民団体によって新たに栽培されている桑の木もあります。市民の憩いの場として、また、養蚕文化に触れられる場として、第一蚕室を周辺環境と一体のものとして保存活用を図っていきたいと考えています。

写真１　第一蚕室外観

写真２　第一蚕室内観

写真３　誕生した「桑園」

写真４　子供たちに愛される

写真１　第一蚕室外観　蚕室に沿って欅が植えられている。蚕室の温度管理を重視した植栽と考えられる。現在、蚕室は保護のため内部公開日以外は閉鎖している。（平成２８年５月１４日撮影、以下写真はすべて同日撮影。）

写真２　第一蚕室内観　中央に埋薪炉、側壁に加温用のボイラーからの配管、奥に電気暖房機と加温方法の変遷がわかる。

写真３　誕生した「桑園」　市民団体「蚕糸の会」により、日野桑園で品種改良された桑が栽培されている。

写真４　子供たちに愛される公園　桑園時代からの樹木や水路に加え、移転後に繁茂した草木も多く、子供たちにとっては、外遊びの格好の場となっている。市民団体が定期的に子育て広場として運営している。

横浜山手西洋館の絹とのかかわりと、近年のあらたな取り組みについて

堀内　貴雄（公益財団法人　横浜市緑の協会）

維新後の日本近代化を支えた絹産業において、横浜は、当時関東における絹貿易の重要な輸出港だったことはご存知と思います。私たち(公財)横浜市緑の協会が管理する横浜山手西洋館にも、生糸貿易商社シーベル・ヘグナー商会（現ＤＫＳＨジャパン株式会社）の横浜支配人であったＦ・エリスマン氏が建てた「エリスマン邸」(A・レーモンド設計）や、日本から和紙や絹織物等を欧州に輸出していたイギリス人貿易商Ｂ・R・ベリック氏が建てた「ベーリック・ホール」(J・H・モーガン設計）などがあり、横浜山手西洋館は、横浜における「絹遺産」のひとつ、と言えるかと思います。

「エリスマン邸」の施主、Ｆ・エリスマン氏は、1888 年（明治 21 年）に来日し、1890 年（明治 23 年）には、すでにシーベル・ヘグナー商会に勤務していたようです。シーベル・ヘグナー商会は、当時横浜で一、二を争う生糸貿易商社として知られ、エリスマン氏は同商会で生糸貿易に従事し、活躍したとのことです。エリスマン氏は 1940 年（昭和 15 年）に死去するまで横浜で過ごし、その亡骸は、横浜の港を望む横浜山手の外人墓地に今も眠っています。

Ｆ・エリスマン氏

エリスマン邸（Ａ・レーモンド設計）

エリスマン邸館内（１階居間兼食堂）

「ベーリック・ホール」の施主、Ｂ・Ｒ・ベリック氏は、1898 年（明治 31 年）に 25 歳で来日して、既に横浜にあったベリック商会の社業を継承すると、海外から洋紙、小間物類、薬種、諸機械類、絵具、鉄類、毛織物類、硝子類、写真機類、石版類等を輸入するかたわら、横浜から羽二重、ハンカチーフ、日本紙類、陶器、漆器その他雑貨類を輸出していたようです。氏は、1941 年（昭和 16 年）に日本を離れるまで、横浜の地で、貿易業を通じ絹産業に関わったとのことです。

ベーリック・ホール（Ｊ・Ｈ・モーガン設計）

ベーリック・ホール館内（１階居間）

Ｂ・Ｒ・ベリック氏

彼らの足跡は、各館でも紹介していますので、横浜にお越しの際は、是非お立ち寄りいただけましたら幸いです。

さて、横浜山手西洋館では、近年新たな取り組みとして、江戸時代初期の朱印船貿易等で、絹の輸入地であったベトナムと、市民交流を始めています（昭和女子大学国際文化研究所との協働事業）。

フランス統治時代の歴史的建造物（西洋館）が数多く残されている、ベトナム国テイエンザン省カイベー市の西洋館所有者と交流しながら、横浜山手西洋館の管理運営で培った、歴史的建造物の活用ノウハウを伝えていこうというものです。

キエット邸

バードック邸

この市民交流は、2013 年（平成 25 年）に、カイベー市長らからなるベトナムの訪問団を、横浜山手西洋館が受け入れたことから、具体的な取り組みがスタートし、2015 年（平成 27 年）同 11 月には横浜山手西洋館職員と同ボランティア、昭和女子大学学生らが同地を訪れ、実際にカイベー市の西洋館を装飾するなどして、活用手法を直接伝えることが実現しました。

キエット邸での館内装飾風景

バードック邸での館内装飾風景

装飾を楽しむ観光客

（左）ベトナム西洋館所有者との交流の様子

（右）ベトナム西洋館所有者の横浜山手西洋館視察の様子

同 12 月にはカイベー市の西洋館所有者が来日し、横浜山手西洋館を視察。横浜山手西洋館職員や同ボランティアと活用における意見交換を行いました。この様子は NHK ワールドでも取り上げられました。

2016 年（平成 28 年）には再び横浜山手西洋館職員らがベトナムを訪れ、さらなる活用手法を伝える予定です。

今後も横浜山手西洋館は、横浜における重要な歴史遺産として、国内外にその魅力や事績を発信していきたいと考えています。

津久井のシルク遺産　旧神奈川県蚕業取締所中野支所を巡って

鈴木　智恵子（エッセイスト・日本文藝家協会々員）

ハマっこは生糸で栄えた港町横浜のシルク遺産のことには詳しいが、横浜の生糸貿易を支えた神奈川県内の養蚕業についてはあまり知らない。

そう気付かせてくれたのは、県央の津久井から届いた一通のメールと資料でした。地元の市民グループ「屋根のない博物館」代表として、自然や郷土の歴史の伝承など様々な活動をしている保阪健次氏(68 才)が、津久井郷土資料室(旧神奈川県蚕業取締所中野支所）の保存を訴えてきたのです。

■神奈川県の養蚕と蚕業取締所

横浜では博物館や図書館でいつでも生糸に関する様々な情報を得ることができます。2014 年には「横浜絹回廊」と題して、シルク博物館、横浜開港資料館、神奈川県立歴史博物館の三館で、生糸をテーマにした特別展を同時開催しました。このような横浜のシルク関係の催しなどで、養蚕地帯として横浜と密接な関係が強調されてきたのは、古くから養蚕が盛んだった北関東や甲信地方であり、神奈川県内の養蚕についてはあまり知られていませんでした。

しかし、県内でも、北部・西部の山間や中央部の台地で、江戸時代から養蚕や製糸は行われており、明治三十年代になると、横浜港の生糸貿易と結びついて次第に盛んになります。このような養蚕業の繁栄を背景に、大正 4 年、県央の高座・愛甲地区の厚木町に蚕業取締所の本所、西湘地区の吾妻村二宮に二宮支所、津久井地区の津久井郡中野町に中野支所がそれぞれ設けられました。支所の設置は津久井が県内有数の養蚕地帯へと発展した証でした。

■津久井の中野を訪ねて

神奈川県北西の山間部に位置する津久井は、戦国時代に山城の津久井城が築かれた歴史ある地ですが、平成 18 年に相模原市に編入され、津久井という由緒ある地名は消えました。支所があった中野町も今は相模原市緑区中野です。ハマっこの私でさえも津久井を相模原市緑区と呼ぶのにはかなり違和感があります。津久井を故郷とする地元の方々はどう感じているのでしょうか。そんな思いを抱きながら、初めて津久井を訪れました。

ＪＲ横浜線に乗って橋本駅で降り、三ヶ木行きのバスに乗って約 30 分。（ちなみに、横浜線は明治 41 年に八王子や甲信地方の生糸を横浜に運ぶために開業した鉄道です)。途中、城山ダムがある津久井湖や津久井城址を含む城山公園の風景を車窓から楽しみながら、バスは旧道の中野商店街を進みます。中野には赤十字病院や県政総合センター、津久井警察署、津久井商工会などがあり、法務局や簡易裁判所などかつて国の出先機関あった昔と比べる閑散としていますが、今も津久井の中心であることがわかります。また、郷土資料室に近い又野は、憲政の神様と呼ばれた尾崎行雄(蕚堂)の出身地で、生家跡には、中野町出身の建築家井上一典が設計した尾崎蕚堂記念館がたっています。

■津久井郷土資料室(旧蚕業取締所中野支所)

昨年 3 月に老朽化を理由に閉鎖された郷土資料室の建物は平成 29 年度以降の解体が決まっています。昭和 27 年に中野支所の新庁舎として建設された建物は、昭和 46 年に郷土資料室と転用されました。早期再開を願う保阪氏は、津久井の養蚕の繁栄を示す建物の解体を惜しみ、郷土資料室が収蔵する貴重な郷土資料等の散逸を恐れて、相模原市に建物の登録文化財指定を求めたのです。

現地で建物を見ると、老朽化して改修にはかなりの費用がかかること、元々建築物としての価値が高いとは言えないこと、さらに郷土資料室に転用する際に左側部分を切り取るなど一部改築してデザイン上のバランスが崩れていることがわ

かり、建物の登録文化財指定は無理だと感じました。もちろん津久井養蚕の歴史の証人として文化的価値はありますが、古い建造物の保存・再生に繋がる登録文化財指定は建物自体に価値がなければ難しいでしょう。中野の建築で価値があるのは、むしろ神奈川県発行の「神奈川県の近代化遺産:神奈川県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書」掲載の近代洋風建築の旧東屋撚糸店の方です。

「津久井郡文化財　養蚕と炭焼き　産業編」に載っている昭和三十年代の蚕業取締所中野支所の写真をみると、素朴な建築ですが、赤い瓦屋根の大きな屋根を真ん中に、左右に小さな屋根が広がるデザインは牧歌的で、背後の山並みと調和して美しかったのではないかと思います。まさに津久井の養蚕のシンボルにふさわしいような風景です。

■県内の養蚕業の終焉

平成 22 年 10 月 3 日の神奈川新聞は「県内の全 12 農家廃業へ、繭の最後の出荷作業行い名残惜しむ」と、神奈川県の養蚕の終了を伝えています。国の養蚕農家への助成金制度の廃止を受けて、長い歴史を誇り、横浜の生糸貿易の繁栄を支えた県内の養蚕業は静かに幕を閉じました。津久井でも二軒の農家が最後まで頑張り、平成 23 年 12 月には、五世紀まで遡るという津久井養蚕 1500 年の伝統を後世に伝えたいと、津久井養蚕振興協議会によって、JA 津久井郡串川支所に起源から廃業までの歴史が刻まれた碑が建立されました。

■養蚕をキーワードに津久井の活性化を

産業としての養蚕が終わっても、その文化と伝統技術や生物工学的な研究成果などは後世へ伝えていく必要があります。津久井郷土資料室の資料は相模原市立博物館に引き継がれました。津久井の養蚕の技術と文化の記録はそちらで伝えられるはずですが、津久井の資料をすべて相模原市立博物館で、というのは少々無理があるように思います。津久井の郷土資料はやはり津久井で収蔵して利用するのが最適です。中野に津久井養蚕の歴史のシンボルとなる新しい郷土資料室を建設し、養蚕をキーワードに中野の活性化をすることができたら・・・・。

夢のような話ですが、近くには尾崎蕚堂記念館もあり、中野商店街には近代洋風建築のシルク遺産である旧東屋撚糸店や県内で最も古い歴史をもつ蔵元「清水酒造」などがあります。こうした文化資源と津久井湖や城山など観光資源、豊かな自然を繋げて活かせば、津久井は文化と観光の両面からシルクの里としてとても魅力的な地になると思います。

桑畑が広がり、養蚕のための水車が回っていた津久井。そこで蚕を天からの頂き物としてお蚕さま(おこさま)と呼んで大切に育て、熱心に養蚕の信仰をもち、養蚕の行事を欠かさなかった先祖の暮らし。その暮らし方こそ、今を生きる私たちが見習って大切にすべきシルク遺産であると感じています。

旧東屋撚糸店　　写真提供　保阪　健次氏

群馬県の養蚕民家と集落Ⅱ

中村　武（NPO 法人 街・建築・文化再生集団）

日本各地には、養蚕を行うために作られた茅葺き民家が、絹産業遺産として数多く残されています。最上には田麦俣の高ハッポウと呼ばれる多層型民家、甲州の突き上げ屋根とも櫓造り呼ばれる甲州型民家、五箇山や白川郷の合掌造りなど地域独特の形態を持った養蚕民家が存在します。但し、それらの多くは、養蚕が生業の多くを占めるようになって、改造されたものと報告されています。養蚕に特化された建物が作られたのはそれ程昔のことでなく、日本の近代化の歩みと共に作られ、発達したものと考えられます。

群馬には、屋根の平部分中央を切り落とした養蚕民家があります。「赤城型民家」と言います。その幾つかを紹介したいと思います。名前の由来は、昭和３年、赤城山南麓の勢多地区に民家視察で訪れた今和次郎（当時早稲田大学教授）が「民家に一の新型を発見した。まさに『赤城型』と称すべきか」と述べたところに因ります。かつての赤城南麓の風景は、小麦と桑畑の中に、杉の防風林を背中に背負った「赤城型」養蚕民家が点在していました。その様子は今でも想像できます。明治中期以降になると、その中に総２階瓦葺き、板葺きの養蚕民家が混在してきます。

発達した赤城型民家（前橋市富士見町）

群馬県で１棟だけ、養蚕民家として文化財に指定されている旧関根家住宅主屋（前橋市）は、中規模な養蚕民家で、典型的な「赤城型」民家の遺構です。伝承では天保九年（1838 年）建造とされています。旧関根家住宅が移築された地域には、弘化から嘉永初めに建てられたと推定される観昌寺旧庫裏（国定忠治愛妾菊池とく旧居）があります。同型、同規模の「赤城型」民家です。

前橋市指定重要文化財「旧関根家主屋」

撮影：北田　英治

民家研究家矢島胖（元前橋市史編纂委員）は、「養蚕のために工夫されたキリオトシ屋根（いわゆる赤城型）は、赤城山麓だけの特有の型でなく、上州一帯に広く分布しており、同じく養蚕民家であるツキアゲ屋根（榛名型と呼ばれている）の二つの型を様式として「上州型」民家あるいは「上州づくり」と呼ぶ事にしたい」と述べています。また、研究者によっては「赤城型」と呼ばずに「切り上げセガイ」、「中切り型」と読んでおります。

「赤城型」民家の初出は 19 世紀初頭と言われていますが、実見すると殆どに改造の痕跡が有り、建造当初から赤城型のものにはそれ程古いものはありません。「上州型」民家は、他の地域と同様、「養蚕法」の改良や江戸末期から明治初頭にかけての生糸需要の増大による養蚕の経営規模の拡大に伴い、小屋裏を蚕室に有効利用するために、屋根の平側中央正面を切り落とし、或いはツキアゲ、小屋裏の採光と通風のために窓（開口部）を設け、発達してきました。県内にある復原された国重文指定の古民家も解体前の状況を見ると、改造された養蚕民家であったことが確認できます。

観昌寺旧庫裏（国定忠治愛妾菊池とく旧居）古写真

この他にも、県内各地に特色のある養蚕民家が存在します。その中から、養蚕を中心に工夫しながら生活していた先人の知恵を学ぶことが出来ます。機会を改めて特色のある養蚕民家をご紹介したいと思います。

JA 前橋市大胡稚蚕人工飼育所

村上　雅紀（上州文化ラボ）

昭和 34 年、群馬県には養蚕農家は約 83,000 戸（全農家戸数約 120,000 戸）近く、戦後最大の收繭量は昭和 43 年に 27,400ｔを記録しています。それが、平成 28 年には 118 戸、生産量 44ｔまで減少しています。それでも全国一の繭生産県です。

蚕は、種から孵化（掃立）し 4 回休んで、4 回脱皮（1 齢～5 齢）したあと、熟蚕となり繭をつくります。かつては、農家自身で掃き立てから営繭まで行っていましたが、3 齢までは病虫害に掛かりやすく、繭の当たり外れが多いことから、戦後、管理された共同飼育所で幼蚕期の 3 齢まで飼育されるようになりました。3 齢まで育つと、各農家に配蚕され、約一月弱育てられ繭として出荷されます。今回は、JA 前橋市大胡稚蚕人工飼育所から養蚕家の松村さんの上蔟までを取材しました。

■稚蚕共同飼育から繭ができるまで

JA 前橋市大胡稚蚕人工飼育所(責任者 楠由輝夫)は群馬県前橋市横沢町(旧大胡町)にあります。当飼育所は、掃立から配蚕まで(1～3 齢)の稚蚕飼育を行なっています。

昭和 60 年代、JA 大胡管内で、掃立量の減少と労力不足等により、桑育の飼育所の運営が困難になり、管内 11 ケ所の桑育の飼育所を統合し、無菌区の環境の中、人工飼料で稚蚕が飼育できる当飼育所を建設しました。(平成元年稼働)

現在、当飼育所で 3 齢まで稚蚕を飼育して、群馬県の全域及び栃木県の一部地域(那須地区)の養蚕農家にお蚕を供給しています。当飼育所は、群馬県富岡市にあります JA 甘楽富岡小野稚蚕人工飼料飼育センターとともに県内の稚蚕飼育の拠点として県内外の養蚕業を支えています。また、前橋市上泉町にあります JA 前橋市桂萱稚蚕共同飼育所(前橋遺伝子組換えカイコ飼育組合運営)では、遺伝子組換えカイコ(GM カイコ)を飼育して、研究用試薬・診断薬用抗体の製造や医療品タンパク質の開発など医療分野の研究開発に大きく寄与しています。

当飼育所の責任者 楠由輝夫氏は、稚蚕飼育の間、四六時中二十四時間体制で、機械等のメンテナンスをはじめ温度・湿度の徹底管理を行い、良好な状態で養蚕農家に配蚕できるよう日夜務められています。このような献身的な飼育努力を長く続けてこられました。また、養蚕農家の方々の心血を注ぐ日々の取り組みがあって、日本の蚕糸業が支えられていることを改めて実感しました。ご多忙のなか、取材のご協力をいただきました、JA 前橋市の楠由輝夫様、養蚕家の松村哲也様、前橋市の養蚕農家のみなさまに敬意を表するとともに、厚く御礼申し上げます。

□JA 前橋市大胡稚蚕人工飼育所　平成 28 年スケジュール

春蚕	実績箱数 120 箱	5/8 ～ 5/18	新小石丸、ぐんま 200、白麗、春嶺鏡月
春蚕第二	実績箱数 60 箱	5/19 ～ 5/29	春嶺鏡月、ぐんま 200
夏蚕	計画箱数 100 箱	6/18 ～ 6/28	春嶺鏡月、ぐんま 200
初秋蚕	計画箱数 60 箱	7/18 ～ 7/28	錦秋鏡和
晩秋蚕	計画箱数 130 箱	8/29 ～ 9/8	ぐんま 200、錦秋鏡和、上州絹星
初冬蚕	計画箱数 60 箱	9/20 ～ 9/30	ぐんま 200、錦秋鏡和

※年 6 回の飼育を通じ、約 500～600 箱(およそ 1500～1800 万頭)を飼育

ロータリー飼育機による給餌

人工飼料

2 齢の蚕が人工飼料を食べている

3 齢の蚕の配蚕準備

農家への配蚕

配蚕された蚕を棚に拡げる

上族前の熟蚕、下には蚕を拾い上げるため網が敷いてある

条桑から蚕を下に敷いた網に払い落とす

網に払い落された蚕を集める

こぼれた蚕を 1 頭 1 頭拾い上げる

集めた蚕を上蔟小屋に運び、床に拡げる

拡げた蚕の上に網を被せると網の上に這い上がってくる

上族の準備、回転まぶしの上に秤で計測した一定量の蚕を撒き、天井に吊り下げる

回転まぶしに入った蚕は繭を作るために 1 頭ごとに区画に入っていく一区画に 2 頭入って出来た繭を玉繭と言い、屑繭として処理される

繭が出来上がると選繭され、けば取りを経て出荷される

近代製糸業とキリスト教

藤岡一雄（キリスト教研究者）

明治期の上州・群馬は養蚕製糸とキリスト教に特徴づけられる。

群馬の近代養蚕製糸は全国的に指導的位置を有し、座繰り機を駆使した組合製糸の名で知られている。明治 3 年、全国に先駆けて前橋藩営器械製糸所（大渡製糸所）を開設、関根製糸所（研業社）、そして、前橋精糸原社を興して士族授産と商人資本からの独立を企画したのは前橋藩少参事深澤雄象で、明治 10 年、前橋有志協同製糸会舎を起こして出資金に応じた配当金を得られるよう考案された画期的な産業社会組織で現代の共同組合の先駆とも言えるものである。

深澤　雄象

碓氷社はこの協同製糸会舎を手本として明治 11 年 8 月、「碓氷座繰精糸社」（頭取萩原音吉）として発足、その後、西上州南三社に、そして、全国に発展する。碓氷社の加盟県別組合は群馬（127）、長野（3）、埼玉（46）、東京・千葉・静岡・鳥取（各 1）、茨城（13）、福島（8）、秋田（2）の他、栃木、神奈川、新潟にも広がり大正 2 年が最大、売上高は 400 万円を越えているが県外の加盟数は全体の 35 パーセントに過ぎなかったものの、組合製糸が関東から東北にかけて広がつていることが注目される。組合製糸は農業の副業とする養蚕座繰り製糸家の共同連帯の生産活動の推進に依る高品質生糸の製造と大量出荷や外国への直輸出を図り奸商等による粗製濫造繭の矯正に依る増収・収益分配の拡大を図ろうとするものであった。その上、会員各人が生産から生活に至るまでの情報を共有し、住宅兼工場の特徴ある養蚕農家・上州民家を出現・普及させている。しかも、こうした組合製糸普及の背景には近代農村社会改革とこれを支えた基督教精神の内包を伺い得るのである。前橋協同精糸会社結成者の深澤は群馬のギリシア正教会の柱石として、また、西上州の一角にあって碓氷社の萩原茂十郎・同瞭太郎、宮口二郎等は新島襄に魅せられた安中組合教会有力者が経営に関与したもので組合製糸へのキリスト教の影響には大なるものがあったと見られる。

関東から東北にかけてはニコライのギリシア正教会が旧士族階層中心に、新島の組合教会も浸透を重視していたした地域でもある。東北の山形県置賜地方は明治以来羽前エキストラ格の良質糸産出と「一家から三人の女工が出れば」の格言からもしられる優秀女工養成地として知られるが後年、綾部の郡是製糸（波多野鶴吉）が長井に進出して製糸工場を建て製糸女工の基督教主義の女学校を営んでおり製糸とキリスト教の関わり深さを示す土地である。時代の経過と進展、製糸業の進展に伴うと人と物資の移動に依って直接・間接に伝搬した組合思想やキリスト教思想の普及もまた想定されるのである。近代産業の内、養蚕製糸や紡績業には女工・女子従業員への依存度が高く数的・質的存在が問われ続けてきた。曾ての鐘淵紡績所にはキリスト教会堂が設けられ、県内でも新町屑糸紡績場　後の新町鐘紡でも女工の教育に寛容で教会出席も奨励されていたと伝えられ、組合製糸とキリスト教問題に集約される感がある。

新島　襄

（2016．6）

シルクロード・ネットワーク横浜フォーラム「シルクでつなぐ街と人」　記録

●見学会「横浜市中区本町界隈の絹遺産を巡る」　【日時】2015 年 3 月 14 日(土)14:30-16:30

開港記念会館→日本大通→象の鼻パーク→中居や旧横浜生糸検査所付属生糸絹織物専用倉庫（横浜市認定歴史的建造物

●セミナー「シルクロード・ネットワーク・横浜フォーラム」

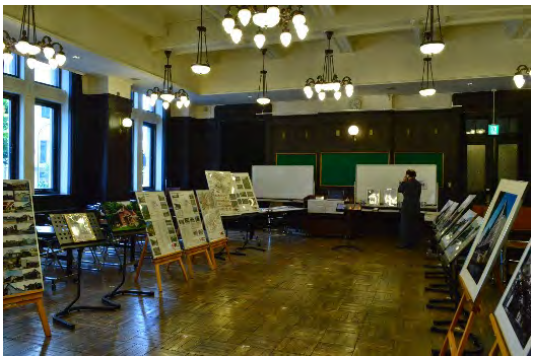
【日時】2015 年 3 月 15 日(日)11:00-16:00（受付 10:30）

【会場】横浜市開港記念会館【講堂】講演会・全国の事例報告【１号室】全国の事例パネル展示・物産販売

【記念講演】「絹の歴史と文化・原三溪」川幡留司氏（公益財団法人 三溪園保勝会）

【基調講演】「横浜の絹関連建造物の魅力」吉田鋼市氏（横浜国立大学名誉教授・公益社団法人横浜歴史資産調査会副会長）

【記念コンサートピアニスト】後藤泉～ピアノが奏でる絹・横浜～



絹遺産のイメージ

□蚕種・養蚕・製糸に直接関わる建造物：

蚕種・養蚕民家及びそれに付随する建物、繭蔵（土蔵・れんが蔵）、蚕種・製糸・撚糸工場及び関連施設（水車、貯水槽、煙突、発電所等）、稚蚕飼育場、風穴（蚕種）、養蚕学校々舎・結社・各事業家の生家、居宅（岡谷の旧林家住宅）等

□繭・生糸の販売、流通に関わる建造物：

絹・生糸問屋の店・住宅、生糸・繭蔵、繭・生糸市場（買場）・取引所・検査所等

□器械・器具、三分野(蚕種・養蚕・製糸)の技術

□製品：絹織物（全国各地に伝わる絹織物）

□上記に関わる人物の物語、事跡、遺跡、遺物（渋沢栄一、尾高惇忠、田島弥平、片倉兼太郎等）

（例：星野長太郎、深澤雄象、湯浅治郎他－明治初め、群馬では、地域の資産家、豪農 、指導者たちが、新しい日本を築くための思想（自由・平等・博愛の精神）としてキリスト教を受容し、その精神は、養蚕製糸業の経営を支える大きな力となった。）

□運送・交通：運送業、鉄道、駅舎

□集落：養蚕集落、絹産業で潤った町並

□信仰：神社等（蚕影神社、碑等）

□その他の建造物：絹産業で潤った飲食街、料亭等、娯楽・厚生施設(片倉館、岡谷病院)

□文物：養蚕指導書等、護符（新田義寄（温純)、徳純、道純、俊純の猫絵、少林山の縁起達磨等）

□習俗：養蚕製糸に関わる習俗、お祭り、お祝いの絵札等

シルクロード・ネットワーク　第１号

● 目次

・生糸産業とヨコハマ、そして原三溪：西　和夫（神奈川大学名誉教授） 05
・「絹の歴史・文化と原三溪」：川幡留司（公益財団法人 三溪園保勝会） 06
・横浜の生糸に関わる建築遺産：吉田　鋼市（横浜国立大学名誉教授・公益社団法人横浜歴史資産調査会副会長） 07
・山形県新庄市：加藤　明（山形県新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室） 09
・日本最初の民間器械製糸所「二本松製糸会社」：中村　武（NPO 法人 街・建築・文化再生集団） 13
・岡谷近代化産業遺産群　長野県岡谷市：高林　千幸（岡谷蚕糸博物館） 14
・現代に活きる・伝えたい － 片倉館の地域への想い：長野県諏訪市山崎茂（片倉館　館長） 15
・蚕都上田の絹遺産～蚕種から製糸まで　ソフトとハードの高融合～長野県上田市：中沢徳士（上田市教育委員会） 16
・信州小諸「糸都」（ しと ）として栄えた城下町：荻原　礼子（NPO 法人 小諸町並み研究会） 17
・庄川流域の合掌造り家屋：岐阜県大野郡白川村 松本　継太（白川村教育委員会） 18
・東御市海野宿 － 長野県東御市海野宿：堀田　雄二（東御市教育委員会） 19
・千曲市の絹の道、点と点　長野県千曲市：矢島　宏雄（千曲市教育委員会） 20
・群馬県の養蚕民家と集落：中村　武（NPO 法人 街・建築・文化再生集団） 23
・群馬県昭和村の養蚕民家　群馬県昭和村：兵藤　喜孝（昭和村村会議員※文教産建常任委員委員長） 24
・世界文化遺産となった荒船風穴-群馬県（富岡製糸場と絹産業遺産群）：大河原 順次郎（群馬県下仁田町教育委員会） 25
・旧安田銀行担保倉庫　群馬県前橋市：村上　雅紀（上州文化ラボ） 26
・絹遺産：人物 － 蚕都豊橋の基礎を築いた「小渕しち」：中村　武（NPO 法人 街・建築・文化再生集団） 27
・蚕影（こかげ）神社　茨城県つくば市神郡：居島真紀・木村美希（筑波山麓わた部） 28
・旧東光社女工寄宿舎 － 桜川市真壁町桜井：藤川　昌樹（筑波大学教授） 29
・飯能織物協同組合会館：浅野　正敏（一般社団法人埼玉県建築士事務所協会） 30
・飯能地方のはたおり唄から「うちおり」ビデオを制作：石井　英子（飯能の“みんよう”保存会） 31
・甲州市塩山下小田原上条伝統的建造物群保存地区（ 茅葺切妻造民家 ）：飯島　泉（甲州市教育委員会） 32
・旧蚕糸試験場日野桑園第一蚕室と仲田の森遺産発見プロジェクト東京都日野市：
田中　和夫（仲田の森遺産発見プロジェクト／街・建築・文化再生集団／東京都立田無工業高等学校） 33
・全国の鋸（のこぎり）屋根：吉田　敬子（写真家） 34
・開港の街横浜・山手西洋館の管理運営について：酒井　浩次（公益財団法人　横浜緑の協会） 35
・シルクロード・ネットワーク・横浜フォーラム 2015「シルクでつなぐ街と人」：3 月 14 日（土）見学会 37
・シルクロード・ネットワーク・横浜フォーラム 2015「シルクでつなぐ街と人」：3 月 15 日（日）フォーラム 38

–シルクロード・ネットワークの活性化にむけて

横浜は絹貿易拠点として栄え、現在の発展は絹によって築かれたと言っても過言ではありません。とはいえ、現代の都市開発の中で、絹産業の記憶が、正当に評価されることなく忘れ去られようとしている事実もあります。横浜には、絹産業が築き上げた建造物等の遺産や膨大なシルク関連資料、そうした資料の中にしか見られない多くの先人達の物語等が残されており、私たちは、これらを明日の横浜に伝えていくべき地域資産として考えています。そして、これらは横浜単独で出来たものではなく、多くの地域と結びつき、先人達の着想と努力で築き上げられたものです。横浜から絹の道を辿ると全国に及び、各地に蚕種・養蚕・製糸・織物・流通等の絹遺産が今も息づいています。また、富岡製糸場の世界遺産登録をはじめ、近年、蚕種や養蚕で繁栄した町が重要伝統的建造物群保存地区に選定されたり、製糸工場や鉄道関連施設が重要文化財に指定されたりして、絹産業遺産が、重工業だけでなく日本の近代産業遺産として目を向けられつつあります。

こうした事実を踏まえ、絹文化の足跡を振り返り、文化遺産として将来に亘り継承していくことと、地域活性化の切り札として活かす手だてを多くの地域と連携して創り上げる為に、2015 年 3 月に「シルクロード・ネットワーク協議会」を設立しました。

公益社団法人横浜歴史資産調査会では、平成２７年９月１日より正式に活動を開始いたしました。さらに、この度、当会で「歴史を生かしたまちづくりファンド」を設立し、同ファンドを核に即効力のある事業展開を行うつもりです。

全国の絹関連団体や市町村と連携を深め、将来にわたり絹文化の調査、保全、活用提言等に邁進いたして参ります。

つきましては、ぜひ「シルクロード・ネットワーク協議会」へのご協力、ご参加をお願い申し上げます。

公益社団法人横浜歴史資産調査会）常務理事・NPO 法人 街・建築・文化再生集団理事　　米山　淳一

＜ご 入 会 案 内＞

１．年 会 費　毎年４月１日～翌年３月３１日
　　個人会員　　３，０００円
　　団体会員　１２，０００円
　　賛助会員　１２，０００円

２．取引銀行　三井銀行横浜支店
　　振込口座　普通　７２５０２５９
　　口座名義　公益社団法人横浜歴史資産調査会

碓氷峠第三橋梁（群馬県安中市）国指定重要文化財
写真：米山淳一

３．連 絡 先　公益社団法人横浜歴史資産調査会
　　住　所：神奈川県横浜市中区相生町 361　泰生ビル 405
　　Tel：045-651-1730
　　担　当：米山・花形

国指定重要文化財　氷川丸昭和５年（１９３０）横浜ーシアトルを結ぶ貨客船として建造。生糸専用の船室を設置。

写真：米山淳一

シルクロード・ネットワーク・新庄フォーラム２０１６「シルクロードでつなぐ街と人」

今事業は、地域づくり団体全国協議会「平成 28 年度地域づくり団体活動支援事業」のご支援と、ハッスル株式会社様の御協賛を頂きました。心より御礼申し上げます。

発行年月 2016 年 6 月

編集・発行　公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）
tel：045-651-1730　mail：yh-info@yokohama-heritage.or.jp
NPO 法人　街・建築・文化再生集団
tel：027-210-2066　mail：act@npo-rac.org